

【一】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「西吉倉海洋少年団」は、「畠山」という山に登ることになった。しかし、杉浦一郎がひきいる「柿ノ谷少年特務班」のわなにはまり、山頂への道を間違えてしまふ。「西吉倉海洋少年団」の団長である石井明は、間違えた先で「柿ノ谷少年特務班」が「西吉倉海洋少年団」あてに書き残した手紙を発見する。

「やあ、西吉倉海洋少年団の諸君、ごくろうであつた。諸君らは、われわれ柿ノ谷少年特務班の手による、にせの道にさそひこまれたのである。そして、ここがどんづまりである。諸君らのせつこうがのこしたほんものの矢じると、われわれの手による矢じるとのちがいを、つぎにせつめいするから、道をぎやくにとつて、もともどるのが賢明であろう。なおわれわれは、卑劣なしゆだんをいっさい排除したうえで行動していることをほこりに思うものである。なぜならば諸君らがいつそう注意ぶかく、いっそう慎重であつたら、けつしてこゝへまよいこむはずがないよう、われわれはじゆうぶんに配慮していた。

この手紙を読んだら、おこる前にまずゆだん大敵と反省すべきである。  
では、諸君らの幸運をいのる」

たしかに、石井明のひきいる西吉倉海洋少年団の全員は、この手紙を読んだ。ということは、まんまと柿ノ谷少年特務班のわなにひつかつたわけだ。

明は目玉をひんむいておこつた。手紙には、おこる前に反省せよ、なんて書いてあつたが、反省する前にまずおこつた。

「ちくしょう！ やりやがつたな」

だが、あとでは反省した。だからみんなにこういった。

「とにかく、あいつらにかたきをうつのは、あとにしよう。きようはこのまま畠山直行をつづける。せつこうが待っているといけな

い」  
そして、くやしそうにうなつた。手紙をビリビリとひきさいて、ポケットにねじこんだ。いつもなら、やぶにすてるところだが、少年団の団長ともあるうものが、山にごみをちらかすわけにはいかない。

（ちくしょう。きつと、杉浦のやつだ。あいつがやったのにちがいない。それと、あのちびのカオルだ。あのちび、まったくゆだん

がでねえ）

このかたきは、きつととつてやる、と決心した。なにしろ、みんなの前ではじをかかされたのだ。男なら、はじをそそがなければいけないではないか。

月曜日の朝、杉浦一郎は、校門のところで石井明から談判状をわたされた。明はそこにひとりで一郎を待っていて、一郎を見るとだまつて近づき、だまつてわら半紙の手紙をつきだしたのだ。

「なんだ、これは」

④ 一郎が、にやにやしながらいうと、明はぶすりとこたえた。

「きのうのことだ」

「ははあん」

うなずいて、一郎はそのわら半紙の手紙をポケットにねじこんだ。そして、じゃ、あとでな、と、目でいって、教室にはいった。手紙をひろげてみると、こう書いてある。

「きのうは、われわれのくんれんに、とくべつ参加してくれてごくろうだった。だからおれたちは、どうしてもおかえしをしなくては義理がたない。そこで、こんどの海軍記念日に、柿ノ谷のおまえたちの町へ、おれたちがのりこんでいって、そこで一日じゆうあそぶことにした。それがいやだったら、力づくでおいだしてみる。

西吉倉海洋少年団長 石井明

ざつと目をおした一郎は、手紙をていねいにたたんで、こんどはうわぎの内ポケットにしまいこんだ。

⑤ (それにしても、へんなこと、考えつきやがつたなあ)

ほつとしながら、そう思った。じつをいうと、もっと本式なけんかがはじまるかもしれないと、かくごしてきたのだ。町どうしのけんかとなれば、これはもうたいへんである。これまでにも、何回かそんなことがあつたから、よく知っている。

柿ノ谷の少年は、うっかり西吉倉へ足をふみこめなくなるのだ。たとえ、母親といっしょにいったとしても、用心しなくてはならない。いっどこから、小石がとんでくるかわからない。

しかし、こんどは、がき大将の石井明が海洋少年団にこつていたおかげで、めちやくちやなけんかにはしたくなかったとみえる。  
一郎は、休み時間になると石井明のところへいつて、正式につたえた。

「手紙は見たぞ。すきなようにやってみな」

「すきなようにだど？」

明は目をぐりぐりさせた。

「おれたちを、力ずくでおいだしてみせるっていうのか」

「いや、けんかはしないさ」

一郎がまじめにいうので、明は口をとがらせた。

「そうすると、おれたちを、おまえたちの町でのさばらせておくっていうのかい」

「ああ。そんなこと、いたくもかゆくもないぞ。おれたちは按針塚あんじんづかであそぶからいい」

「ふん」

⑥ 明は、いくらかがつかりしたようだった。柿ノ谷の少年は、もちろん柿ノ谷にあそび場がある。そこは、柿ノ谷の少年だけのあそび場だ。そのたいせつなあそび場を、よそものがきて一日じゅう占領\*せんりょうするというのに、一郎はへいきな顔をしていた。明のほうは、もしかすると、はでなとつくみ合いのけんかでも予定していたのかもしれない。一日かぎりのことにすれば、それはそれで、あとくされなしのなかなおりができるだろう。

「まあいいや」

明はつぶやいた。

「とにかく、おれたちは、一日じゅうおまえたちの町へおしかけていつて、そこであそびまわつてやる。それで、きのうのはじは、そそいだことにしよう。なんていつたつて、敵地にのりこむんだからな」

どうだ、それでもんくはあるまい、というように、明が一郎をにらみつけたとき、つぎの授業のはじまるかねがなった。ふたりはうなずきあつて、それぞれの席についた。

すぐに先生がはいつてきて、算術\*さんじゆつの勉強がはじまる。一郎たちの受け持ちは、手代木先生てしろぎという、しずかできびしい男の先生である。

明は、からだが大きいわりには、前のほうに席がある。いたずらばかりしているので、先生の目がとどくように、ひっぱりだされているわけだ。いつぼう、一郎の席は、右がわのいちばん後ろにある。そこが副級長\*ふくきやうの席である。ふたりのがき大将は、それぞれの席からあいての顔を見て、いっしょにやりとした。ふたりとも、なんとなく、おもしろくなりそうだな、という気がしていた。

やがて、一郎のところへ、明から「通信」がまわつてきた。ノートの切れっぱしに書いたもので、こまかくおつた上に「杉浦どの」とあて名が書いてある。

「おまえ、もしかしたら、おれたちが柿ノ谷へでかけているるすに、西吉倉へもぐりこんであそんでやろうなんて、つまらないことを考えているんじゃないだろうな。そうだったら、おれたちはただちに西吉倉へひきかえして、おまえたちをたたきだすからさう思え」

きたない字で、そう書いてあつた——と、いきなり先生が一郎をよんだ。

「杉浦、なにしている」

はつとして、副級長⑦の一郎にもどつた。先生は、ちよつとのぞきこむように一郎の顔を見ただけで、また授業をつづけた。

（佐藤さとる『わんぱく天国』）

\*せつこう……仲間より先に現地に行き、危険がないか探る人。

\*卑劣……ずるいやりかた。ひきょうなここと。

\*はじをそそがなければいけない……受けたはじをぬぐいさならなければならない。

\*談判状……要求の書かれた手紙。挑戦状。

\*占領……ある場所を、独りじめすること。

\*算術……算数。

\*副級長……クラスをまとめるリーダーの一人。

①「反省する前にまずおこった」②「あとでは反省した」とありますが、明がこのようなした理由として最も適当なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

①「反省する前にまずおこった」

ア 柿ノ谷少年特務班がしかけたわなに気づかなかったせつこうを許せなく思っているから。

イ 西吉倉海洋少年団あてに書かれた手紙に団長の自分の名前が無いことにいら立っているから。

ウ 柿ノ谷少年特務班がしかけたわなにまんまとひっかかった自分を許せなく思っているから。

エ 西吉倉海洋少年団のせつこうを見下すような内容が書かれていたことにいら立っているから。

オ 柿ノ谷少年特務班が西吉倉海洋少年団をはめるわなをしかけたことを許せなく思っているから。

②「あとでは反省した」

ア 柿ノ谷少年特務班に仕返しをすぐにしたので、畠山への登山を早く終わらせたいとはやっているから。

イ 柿ノ谷少年特務班に仕返しをしてやりたいが、団長としての役割を果たせなかったことを認めたから。

ウ 何も知らないせつこうが待っているので、早く追いついてわなのことを知らせたいとあせっているから。

エ 柿ノ谷少年特務班のわなにまんまとはまってしまった自分には団長の資格がないと落ち込んでいるから。

オ わなにはまったのはせつこうのせいなので、団長の自分がせつこうをすればよかったと後悔しているから。

③「みんなの前ではじをかかされたのだ」とありますが、どのようなこととはじと考えたのですか。本文中の言葉を用いて二十〜三十字で答えなさい。

④「一郎が、にやにやしながらいう」とありますが、この時の一郎の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 西吉倉海洋少年団がわなにかかったことで成長できたことをうれしく思う気持ち。

イ わなにはまりながらも畠山への登山に成功した西吉倉海洋少年団を祝福したい気持ち。

ウ まんまとわなにはまった明がどのような行動に出るか楽しみにしている気持ち。

エ わなにかかった明がおこって本式のけんかをしてくることを心待ちにしている気持ち。

オ 西吉倉海洋少年団を見事わなにはめたことをほめてもらえるだろうと期待する気持ち。

⑤「ほっとしながら、そう思った」とありますが、一郎がほっとした理由を二十字前後で答えなさい。

問五 ⑥「明は、いくらかがっかりしたようだった」とありますが、それはなぜですか。その理由として適切な一文を本文中から抜き出し、初めの四字を答えなさい。

問六 ⑦「副級長の一郎にもどった」とありますが、副級長にもどる前の一郎は何でしたか。本文中から四字で抜き出して答えなさい。

問七 一郎と明の関係はどのようなものだと考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 明は副級長の一郎に一方的に敵意を持っているが、一郎は明のことを気にもとめていない。

イ お互いにおとしいれることだけを考える関係であり、仲良く話をする気も全くない。

ウ 一見すると仲が悪いようだが、それぞれの地域のまとめ役として認めて合っている。

エ 先生にしかられながらもクラスで人気者の明を、優等生の一郎はうとましく思っている。

オ 本当は仲良くしたいが、それぞれの地域のまとめ役という立場上、それができないでいる。

【二】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

人間教育とはなんでしょう。

それは、企業が企業のためにする教育でも、学校がしてくれるものだけでもありません。生まれたときから、成長していく過程で、ていねいに身につけていく、生きていく心構えなのだと思います。

生きていく心構え——など、中学生や高校生にはむずかしすぎると思わないでください。たとえば朝の挨拶、食事の前後の挨拶だつて、人間教育のもっとも基本的なものなのですから。

学校とは、勉強だけ教えてくれるところではありません。いろいろな個性をもった子どもたちが集まり、クラスを編成し、学年を構成していつて、その全体のなかで自分を発見する場でもあるのです。

自分の発見とは、数学はA君より劣るけれど国語力は自分のほうが優れているとか、成績にはあまり自信はないけれど、いざというときクラスをまとめるにはばくがいなくてはとも無理だ、とかいうこともあるでしょう。級友と論争をしてみても、意外と自分に説得力のあることに気づくなど、一人で勉強部屋にこもっているだけではわからないことが、たくさんあるはず①です。学校とは、本来、ランクづけのためにあるものではありません。でも、現実には五段階、あるいは十段階方式で、あなたたちの能力は評価されます。私自身、また私の息子も、学期末に手渡されるその評価表を見て、落ち込んだり、とび上がって喜んだりした覚えがあります。でも、私たち母子が、あまりその評価に左右されずに過ごしてこられたのは、いつまでもとらわれてはいない性格にもよるのでしょう。ときにはその評価に不満をもったこともあります。でも、世の中には、絶対ということはありません。これは正しいと思うのはよそうと負け惜しみを考えたり、思いがけずよい評価のときは、みんなドジったな、とほかの人のことを考えたものでした。いずれにしても、これは一つの目安である、だから、あとは自分が努力するかしないかによって、来学期はまた変化するものである、と考えていました。

人間にはいろいろなタイプがあります。早くから優秀さの目立つ人と、まったく目立たなかった人がコツコツやつてきたおかげで、あるとき、グーンと伸びてゆく。問題は、そうした個人差にたいして、大人たちがあまり早く固定観念をもつてはならないという②ことに尽きるのです。

リンゴの皮がむけない子、鉛筆がけずれない子のことを大人たちは嘆きますが、これも、大人たちが一生懸命働いて、便利さを

追求していったためですから文句は言えません。文句どころか、そういうことを得意とする子どもたちが、現実にいるのを知らなくてはならないし、その子の特性をのばしていくようにしなければなりません④。

( 中 略 )

全体のなかで自分を発見し、自分を磨いていく。それは全体があつてこそはじめて成立するもので、それが学校という場なのではないでしょうか。物事を固定して考えたらなんの進歩も希望ありません。世の親たちの足をひっぱるようで、少しためらいもありますが、

「世の中、学校の成績だけできまるものではない」

と私はみんなに言いたいです。

中学生といえば、いちばん多感な季節です。きれいな女の子を見ればドキドキするでしょう。すてきな男子と目が会ったりすればポツと頬も赤くなるでしょう。それは思春期のごく自然な感情です。それにとらわれすぎて勉強がおろそかになるのは行き過ぎですが、人生でのもっとも感じやすいとしごろなのです。その時期に、ただひたすら教科書と参考書しか相手がいないというほうがよほど異常なのではないでしょうか。

感じ、考え、自分なりの結論を探していく。そういう訓練がなされていたとき、人間の適応性が生まれてきます。

感じたことを家のなかで話し合える雰囲気があれば最高です。あなたたちの感じ方を知って、親たちはわが子が思っていたより大人になつていゝるなとか、やはりまだ世の中を知らないんだな、などと考えて、きつとその話の輪をいつそう楽しいものにしてくれるはず⑤です。

たまには、「そんなくだらないことよりも早く勉強しなさい」という母親がいるかもしれません。でも、そうした場合、何が、どうくだらないのか教えてください、と⑥言う必要があります。ものが納得でなければつぎに進むことはむずかしいし、納得でないままに進むと、つねに⑤で、ついには⑥なままの人生をおくる危険性もあるのですから。

( 中 略 )

未成年者の親には子の扶養義務が課せられています。親がいな場合は、国や自治体はその役割を果たします。理由は、よりよき成人を社会に送り出し、社会の発展に参加させるつとめがあるからです。ですから、扶養されるということは、きちんと社会参加していける人になるために、いろいろと学び、身につけてゆく期間なのです。みなさんは、この猶予期間を有効に使うことの大切



さを考えていただきたいと思います。

この期間をどうしたら有効に使えるか。それには決定的なハウツーはありません。あなたたちの家の住まいかたが一軒一軒が、家族構成がそれぞれがっているからです。知恵は自分たちでしぼらなければなりません。「放つといて！」と言われても、放っておけないのが、親の側のどうしようもない気持ちだということを、まず頭に入れてください。でも、その気持ちを尊重しすぎると、過保護や干渉過多を起こします。反対に、放っておかれっぱなしでは、生きていくうえに必要な基本的なことが何も学べません。

⑦「ほどほどに放っておかれる状態」、これが自立心を育て、やがての親離れ子離れのためにものぞましいのです。

ほどほどに大人で、ほどほどに子どもである年代を、私は美しいものに見えています。

少々小生意気な子に会っても、私は驚きません、それがその子の本性ではなく、いまはそのようにしか表現できないのだと思うからです。そうとういこじになっていいるなと感じる子でも、ちよつとしたことに感動する姿は、私をも感動させます。このとしごろ特有の柔軟な感性を発見するからです。

みなさんはまさに「限らない可能性」を秘めている年代なのです。そうした可能性の芽をのばすためにも、親子の間でユニークな家庭内ルールを作った人がいますが、こうしたことは、日常を有効に過ごすためにも大いに参考にしたいと思っています。

たとえば、大多数のみなさんのきらいなことのひとつとして、親から帰宅時間のおそい理由を問いつめられることがありますね。親の側からいえばわが子がどんな所で何をしているのかがわからないというのは、もっとも心配なことなのです。

「いままで、どこで、何をしていたのッ！」

と言われると、悪いことなどしていないのに！ という反発がかならず先にたつてしまうものですが、これは⑧のとらえ方だからです。

現代は、思わぬところで事故にまき込まれることだつてあるのですから、子どもの帰宅がおそかったとき、親は、子どもが悪いことをしているのではないかなどとは考えず、事故にあつていいるのではないか、それも、だれにも発見されないような場所で……、と不安はつい悪いほうへ悪いほうへと想像をふくらませていきます。そうしたときの親の姿を見ると、ときどきおかしいほど幼稚っぽく見えることがあります、それは、どの親でも、自分がこの世に送り出した一つの生命の安全を願うという共通した姿でもあります。

つりのりにつつた不安が、わが子の無事なようすを見ると、ホッとして叱責という形で表現されてしまうことが多いのです。それ

が「放つといてくれ」と答えられれば「こんなに心配してやっているのに」となり、その心配が子どもにはわずらわしきとしか伝わらないのは、とてもさびしいことです。だって、心配するのは愛しているからなのですから。

愛情の表現は、もっとわかりやすくしたほうがのぞましいものです。ほどほどに大人でもあるあなたたちは、ほどほどに子どもでもある部分の受け身から、一歩ふみ出して親とのつきあい方を工夫してみてください。

親の心配——愛は、わが子が、どこで何をしているのか、把握できなくて不安をつのらせているのですから、子どもが親の不安をとりのぞく努力をしなれば、この問題はいつまでも解決しません。

(小山内美江子『21世紀を生きる君たちへ』)

\* 固定観念……一方的に決めつけた、とらえ方や考え方をすること。

\* 扶養義務……生活の世話をし、やしなわなければならないこと。

\* 猶予期間……やらなければいけないことを先にのばして、待つてもらっている時間。

\* ハウツー……やり方や方法。

\* 干渉過多……わきから口出しをして、自分の考え方にしたがわせようとしすぎること。

\* いこじ……つまらないことに意地を張って、自分の考えを押し通そうとすること。

\* 叱責……強くしかりとがめ、非難すること。

問一 ①「学校とは、本来、ランクづけのためにあるものではありません」とありますが、学校とはどのようなところだとい

つていますか。本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問二 ②「これ」と ③「これ」は同じものを指しています。「これ」が指しているものを三字以内で答えなさい。

問三

④「そういうことを得意とする子どもたちが、現実にいるのを知らなくてはならないし、その子の特性をのばしていくようにしなければならないでしょう」とありますが、子どもたちの特性をのばすうえで、注意しなければならないことはどのようなことですか。それについて最もわかりやすく述べている一文を本文中から抜き出し、その最初の五字を答えなさい。

問四

⑤と⑥には同じ言葉が入ります。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア であらめ    イ めちやくちや    ウ はつきり    エ ふにやふにや    オ あやふや    カ ちゅうくらい

問五

⑦「『ほどほどに放っておかれる状態』、これが自立心を育て、やがての親離れ子離れのためにもものぞましいのです」とありますが、それはなぜですか。本文中にある言葉を用いて、四十五字以内で答えなさい。

問六

⑧には、本文中で使われている三字の言葉が入ります。その言葉を答えなさい。

問七

本文の内容に合うものとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間の適応性を生むには、感じ、考え、自分の結論を探す訓練が必要である。  
イ 親子の愛情表現はもともとわかりにくく、行きちがい起きて当然である。  
ウ 子どものころ全く目立たなかった人だけが、最後にはのびてゆくものである。  
エ 学校では、級友と論争したりスポーツをしたりすることにこそ意味がある。  
オ 人間教育とは、生きていく上で大切な作法を、子どもに伝達することである。

【三】

次の①～⑩の漢字はひらがなに、カタカナは漢字になおしなさい。

- ① 雑木林でどんぐりをひろう。
- ② 祖父母は漁村で暮らしている。
- ③ いくさで功名を立てる。
- ④ 彼に図書委員を任せる。
- ⑤ 彼の頼みを快く引き受ける。
- ⑥ 道路ヒヨウシキをつける。
- ⑦ ジュンビ運動をする。
- ⑧ 古くからのカンシユウにしたがう。
- ⑨ 悪人を法でサバク。
- ⑩ クワで畑をタガヤす。

【三】【三】

|             |                            |                  |  |        |  |
|-------------|----------------------------|------------------|--|--------|--|
| 在<br>学<br>校 | 立<br>区<br>市<br>町<br>国<br>私 | 受<br>験<br>番<br>号 |  | 氏<br>名 |  |
|-------------|----------------------------|------------------|--|--------|--|